

編集後記

修学旅行で海外へ出かけることや近隣の国から旅行生徒を受け入れることは、今や珍しくなくなっています。2002年に台湾から教育旅行生が初めて来て以来、昨年は136校、5,484人の生徒と教師が来日しましたが、今年は大震災や原発等の影響を受けて減少しそうなのは残念なことです。

9月の連休に大人の修学旅行と称し、数人で京都、神戸、奈良と回ってきました。修学旅行らしく寺社仏閣を訪れ、また、大人らしく関西の評判の立ち飲み酒場をいくつか覗いてきました。

奈良で訪れた薬師寺には、創建以来1,300年を経た木造建築の東塔が現存しています。書籍などが売られている僧坊の中に輪切りにされた空洞のある大木が展示されていました。説明を読んでも、台湾から寄進された樹齢2,500年の紅ヒノキで、伽藍や講堂の復興用に台湾ヒノキが大量に使用されたことの記念に展示保存しているとのこと。既に台湾では伐採が禁止され入手困難となった今では、記録に残る原木であるとの表示もありました。

帰京後に調べてみると、台湾ヒノキは、薬師寺の金堂や西塔のみならず、東大寺の大仏殿や平安神宮などの修築に使われているようです。薬師寺金堂の再建に当たった宮大工の西岡常一棟梁が、20年近く前に行った講演録は面白く、ためになるものでした。金堂が再建したのは昭和51年のことですが、それ以前に日本のヒノキの調達は既に不可能だったため、台湾ヒノキを使用することになり、西岡棟梁が自ら台湾に出かけています。吉野や木曽のようにいくらでもヒノキがあると考えていたのが、現地に行ってみると、海拔1800~2000mくらいのところまで行かないとなく、直径1.5~2mのヒノキは双眼鏡で見なければ分からないところに点在しているという林層の違った所だったそうです。その中で、青々とした若々しい葉をつけているもの、枯死寸前のように見受けられるものがあり、購入にあたっては後者を選んだとのことでした。理由は、前者は往々にして空洞のものが多いと見込んだからで、その選択は現地の人に疑問を持たれたそうですが、搬出後の検査結果では、その通りだったようです。「樹齢が高くなって心材が腐って空洞化してくると樹皮が残り、中心部の木質部を養うことは不要となる、その分が枝葉にまで養分が行きわたり元気な木のような様相を見せる。しかし、心材が詰まっていると養分がこの部分にまで取られるので、枝葉は枯死寸前の格好をしている。大木を買うときは、このような木を買わねば駄目です。このことは人間にも当てはまるような気がします。年老いて、なお太く若々しいのは案外中身がないのでしょうか」と講演を結んでいます。

台湾のヒノキが日本の伝統の寺社建築を支えている事実と歴史があることを知った大人の修学旅行でした。

(貿易経済部次長 早瀬 太)